

【 そえじま 副島 たねおみ 種臣 】 後編

副島は肥前藩士枝吉南郷（えだよしなんごう）の次男として文政11年、佐賀に生まれた。西郷の二ツ下、大久保より二ツ上、江藤新平は六ツ下、大木喬任（たかとう）は三ツ下、大隈重信は十下である。副島はその人格才幹ともに天賦の素質を授かって生まれていたが、その人格形成に最大の影響を与えたのは父であり、兄の枝吉神陽（えだよししんよう）であった。

父南濠は藩校「弘道館（水戸藩、出石藩の同名の藩校と並んで「天下三弘道館」の一つと称された。現、佐賀県立佐賀西高等学校）」の教諭をつとめた佐賀きっての学者であり、肥前藩に勤皇思想を弘めた先覚者でもあった。南濠の主張は「日本には天子の他に君なし、君臣とはただ天子と国民の関係をいう」というものであった。副島は31歳の時養子になるが、兄神陽と共に、こうした偉大な父のもとに育てられたのであった。

兄神陽は六ツ年上であったが、佐賀勤皇運動の中心的指導者となった人物である。父同様藩校で教え、漢学・国学を修め、副島以下江藤・大木・大隈等の佐賀の優秀な人物は皆、神陽を師と仰ぎ、その薫陶（くんとう）を受けた。いうならば佐賀に於ける吉田松陰とも称せられる偉人であった。神陽は楠木正成を尊崇すること厚く、楠公の精神を継承せんと努力し、副島や江藤等もその思想に深く感化を受けたが、惜しくも文久二年、四十歳で病死した。

副島が維新政府に出仕したのは四十歳の時だが、肥前藩士は藩主鍋島直正の命により維新運動への参加を禁じられていた為、副島は約30年の間ひたすら勉学に励むことができ、長崎では外国人に英語と万国公法も学んだ。維新の志士の中で副島ほど学問に励んだ人物はいないのである。副島が他に抜きん出た高い学問と見識を備えられた故に、副島の人格と学問が即座に新政府において認められたのである。

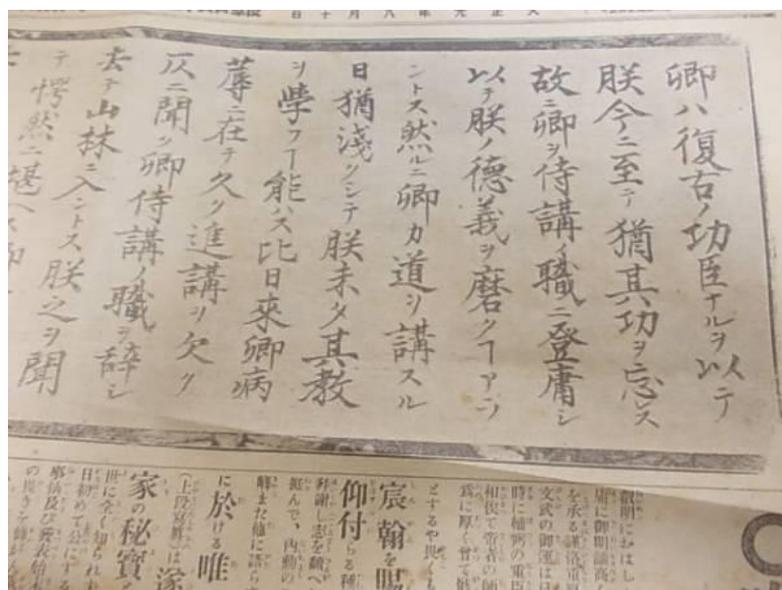
< 異例の御直筆勅語 >

征韓論で下野して再び政治の世界に立とうとしなかった副島の人物を誰よりも惜しんだのは明治天皇であった。副島は前講で述べた如く、一等侍講（じこう）に任命されたが、侍講職の廃止される明治19年まで七年間渾身の赤誠を捧げてお仕えし、天皇並びに皇后に御進講申し上げた。この副島に対し、明治

天皇がいかに深い愛情をかけられたかは言葉に尽し難きものがある。次の如き事件もあった。

一等侍講になってからまもなく、あることから副島廃斥運動が起った。副島は辞職を決意した。これを伝え聞いた明治天皇はこれを思いとどまらせる為、全く異例の直筆の勅語をお与えになられた。それは次の通りである。

「卿（けい）は復古の功臣なるを以って、朕（ちん）今に至りて猶（なお）其の功を忘れず。故に卿を侍講に登庸（とうよう）し、以って朕の徳義を磨くことあらんとす。然るに卿が道を講ずる日、猶浅くして朕いまだ其の教を学ぶこと能（あた）わず。比日来（ひじつらい＝このところ）、卿病褥（びょうじょく）に在りて久しく講を欠く。仄（ほの）かに聞く。卿侍講の職を辞し去りて、山林に入（いら）んとす。朕之聞きて、愕然に堪えず。卿何を以って此（ここ）に至るや。朕道を聞き学を勉む、豈（あに）12年に止（とど）まらんや。將に畢生（ひっせい＝一生）の力を竭（つく）さんとす。卿、亦（また）宜しく朕を誨（おし）へて倦（う）むこと勿（なかる）べし。職を辞し山に入るが如きは、朕肯（あえ）て許さざる所なり。さらに望む。時々講説、朕に贊（たす）けて晩成（ばんせい）を遂げしめよ。」



大正時代になってから公開された御宸翰を報じる記事

勅使より拝受した御宸翰（ごしんかん＝天皇のお手紙）を副島は打ち震える手で拝読した。双眼にあふれる感激の涙はハラハラと膝に落ちた。副島はこの

お手紙をおし戴き、いかなる事があろうとも決して大御心にそむかぬ事を深く心に誓ったのである。またこんな事もあった。

明治天皇は副島の清貧生活を聞かれ、特別に十万円（当時では大金）御下賜（ごかし）の恩命を下された。侍従長は副島の屋敷にきて、これを伝えたところ、副島は感謝にむせんでこれをお受けした。しかし侍従長が帰るや、直ちに参内（さんだい）、明治天皇に御礼を言上（ごんじょう）し、改めてその十万円を辞退した。明治天皇はその訳を問われた。副島は謹んで申し上げた。

「名君は下（しも）万民を平等に愛し給うべきは、今更申し上ぐるまでもございませぬ。一個の副島のみ偏愛し給うべきではありません。今や国内は天災地変多く、悲惨にある人民がおびただしくございます。この金をもって窮民の御賑恤（ごじんじゅつ＝救助すること）にならせられんことを」と。

天皇は深く頷かれ副島の言葉を容（い）れられた。実に副島の後半生は明治天皇の御聖徳の玉成（ぎょくせい）をお助け申し上げる為に存在した、、、、と言える。明治の御代が偉大であり得たのは、かくの如き名君と・かくの如き輔弼（ほひつ）の名臣が存在したからである。副島の人格と学問は、かくして明治の興隆をもたらす礎となった。



明治天皇

<明治日本人の信条>

最後に副島生涯の信念を述べた言葉を掲げよう。

「誠の極というものは、己の泣く時は天も泣き、己の喜ぶ時は天も喜ぶものである。魂には、その師匠として指図をなさる神が止（とど）まってあらせらるる。即ち魂が良知良能を作り出すには、そのお師匠さんがある筈である。このお師匠さんというのは、即ち頂（いただ）きに来たり住める神である。人という語を日止（ひと）と解した説もある。日は即ち神である。孝の中の一番の孝は君に忠を尽くすことである。我が神聖にして宇内（宇内＝世界）無比なる古事記、日本書紀以下の歴史は天地開闢（かいびやく）の初（はじめ）に源（みなもと）せる道義の経典（けいてん）なり。忠孝の名鑑なり。人倫の大綱を事実にも示して万世に垂（た）るる天道の遺範（いはん＝遺し伝えられた規範）なり。この一系の天皇様の御為には、いつでも身命をなげうって御奉公申し上げるといふ心を養うことである」、、、、と。

和漢の学問を究めた高士の言葉であった。明治の日本を興し、これを担った者の心がいかに高いものであったか、その一端を窺い知ることができる。

天皇を国家の中心と仰ぐ我が国の伝統に絶対の誇りと自信を抱き、国家の自主独立を守り抜いた明治の日本人の深い思いがここに簡潔に述べられている。その政治的活躍の期間が短かったことと、侍講という表にあらわれない仕事の為、人々は副島という人物の偉大さを見失いがちだが、実に副島は一世に卓越した人物であったことは疑うべくもない。副島をよく知る板垣退助が「副島こそ真に床の間に座るべき人だ。あの人こそ太政（だじょう）大臣たるべき人である」と述べている。

昭和天皇を輔弼した杉浦重剛（しげたけ）同様、副島種臣も単なる外交官でも教育者でもない。真の愛国者であり、誠の知者・仁者・勇者であり、百世の師表にして「天下の至宝」と称される稀有の人物であった、、、と。立派な教育者とは単なる教育者ではない。表には現われないが愛国者であり、各界におけるリーダーを育てる影の功労者でもある。あらゆるものは「人の質」によって動かされる。その「人の質」に大きな影響を与え「質を高める」のに、大きくかわるのが教育であり、教育者でもあり得る。そのことを。我々に強く印象づけるのは、歴史から学ぶ人物像である。この人物像から「何らかの薫陶を受け」、そして「人は第一の宝にして、己その人に成るの心掛け肝要なり」、、、

との南州翁の教え通り、我々は知らず知らずその人に近づこうとするものである。そして何らかの他人への良き影響を与える事もあり得ると思えるのである。

我々の運動は地味であり、急激に何かの成果につながらないかも知れない。しかし続けるべきだと強く感じている。日本の為に何かお役に立てないかと！！

平成28年8月30日

志雲会塾長 有馬正能